

亀井勝一郎

スポーツの明暗

スポーツの明暗

今朝はスポーツの明暗という題でお話ししますが、実は私自身はいまなんのスポーツも自分ではやっていません、しかしテレビで見物することは大好きで、すもう、野球、それにボクシングも、たまにみることがあります、そういうわけで私のこれからの意見は全く素人の意見であることを御承知願います。

どんなスポーツにもそれぞれいきびしい規則があり、また我々見物人のとうてい理解しえない訓練や、勝負の秘密もあると思います。そういういきびしさを知らずに、

ただ見物していることはたしかに面白いのですが、この面白がるという気持の中には、必ずスリルを求める心があり、しかもスリルを求める心をふりかえってみると、かなり無責任なものではないかと思えます。自分が全く責任なしに見物出来るというところに面白さがあると思います。ところが、これがスポーツの選手に反映した場合どうなるか。

たとえばボクシングの世界的選手のムーアが最近ノック・アウトされたために死にました。私はボクシングの詳しい規則は知りませんが、新聞でみると、この点につ

いて、賛否両論があるようです。ボクシングの真の面白さはノック・アウトにある。ただ危険の前にストップのかけどころがあつて、審判やドクターが充分注意すればよいという説と、同時に、ノック・アウトなど、もともとスポーツの精神に反するから、こういう危険のあるものは禁止した方がよいという説もあるようです。

私自身も、ノック・アウトまでしなくてもよさそうなのがしますが、しかし見物人はまさにそれを望んでいるのであり、それがなくなるときは、なんとなく失望するものです。スリルとか番狂わせとか、意外の出来事とか、す

べて起りそうもないことが起ることを期待しているわけ
で、たとえばすもうの場合も、大鵬の全勝とか連続優勝
を期待しながら、一方ではいつ負けるか、それを楽し
みにしている人もあります。場所全体を通して番狂わせが
ないと、面白くないと思います。

野球もそうです。ホームランを期待しているわけで、
地味な試合はとかく人気がありません。一方があまり強
すぎるのも困ります。

ところで、最近のスポーツ界をふりかえってみると、
全体としてプロ化（つまり職業化、玄人化）の傾向が

よいようです。強くなろうと思って練習すれば、いきおいそれ一筋にうちこまざるをえないと思いますが、その反面に、アマチュア精神は失われてゆくようで、この点
が実にむずかしいようです。たとえば全国高校の野球大会も開かれますが、大学や高校の野球の楽しさは、そこにアマチュアとしての最も楽しい、またのんびりした、
それでいて懸命な試合がみられるからですが、さきにくべた見物人の無責任さからいうと、それだけでは面白くないわけです。

すべて職業となれば、スポーツであれなんであれ、楽

しみをお客さんにもたらさなければならぬのは当然で、それだけスリルとか番狂わせをねらうのもまた当然でしょうが、それが極端になると犠牲者が出ます。いまのムーアの場合もそうでしょうが、直接の原因は、リングの下段ロープに後頭部をうちつけた点にあるそうです。試合を白熱化させるために、それ以前に相当の無理があつたのではないか、身体の調子などを充分考えなかつたのではないかという問題があります。いわば興業政策のために無理をさせられる場合もあると思います。この点はすもうにも同様の場合があると思います。

スポーツマンのこうした犠牲は、本人の準備不足とか不注意もあると思いますが、現代のようにファンが熱狂し、しかも各種のスポーツ新聞やスポーツ・ニュースが、その熱狂にますます拍車をかけると、つい無理が出たり、あるいは神経質になって堅くなる場合もありましょう。職業のつらさと言えばそれまでですが、この熱狂ぶりについて私は一言申し上げたいことがあります。

高校の野球などによくみられますが、その地方の代表などになった場合、地元の人とか、学校の応援団が、ぎりぎりの言葉をかけることがあります。「死ぬ覚悟でや

ってこい」とか「石にかじりついても勝て」とか「死」とか「かじりつく」という言葉を濫用するのは日本人の特徴です。そして負けになると、「申しわけありません」などと言って泣きます。この「死」という言葉と「涙」をやめないかぎり、スポーツは決して健全とは言えないでしょう。つまりお互に切迫した雰囲気をつくることをやめたいということです。

選手がそれを気にすると、今度は堅くなって、平生の力を発揮できなくなる。今度のすもうでも、佐田の山と豊山が不成績だった原因のひとつは、おそらく場所前の

期待の大きさに負けたためかもしれない。ある日テレビのすももの放送で、二子山親方が、佐田の山も豊山も、自分のことをかいた一部の雑誌や新聞をよまない方がいいと言っていたのはたしかにその通りで、場所が始まったら、一切の世評から超然とすべきです。それはスポーツマンでない我々だって同じことです。

この点では選手だけを責めるのは酷で、むしろ見物人の過度のスリル追求と、それに迎合しようとする興業政策に問題があるのではないでしょうか。

今年のテレビ番組でどの番組が一番みられているか。

平均すればスポーツです。その中でもプロレスが第一位です。これは御承知の通りボクシングどころのさわぎでなく、血を流しあいながら、まるで殺したり殺されたりするような、そういうスリルが味わせるわけですが、昨年はこの番組を見ていて、ショックをうけて死んだ人が六人以上あるそうです。これは見物人の方が犠牲者になったわけで、むろん例外だと思いますが、どんなスポーツの見物でも、あまりに熱狂すると、発狂状態におちいるわけで、昨年もみられたプロ野球での弥次馬の騒動とか乱暴など、これは一種の神経障害を起こしたとみなけ

ればなりません。もつともそこまで熱狂しないと面白くないかもしれません。これもさきに述べた「死」と「涙」と同様の過剰現象です。

もうすこし楽な気持で、やる方も見る方もお互に、もうすこしゆとりがあつていいと思います。毎日の新聞のスポーツ欄は私も楽しみに読みますが、まるで天下の大事件でも扱うような報道ぶりに驚くことがあります。つまり一種の興奮剤の役割を果しているわけで、性のとり扱い方と同様、私は病的な現象だと思えます。

日本文学電子図書館

スポーツの明暗

著 者：亀井勝一郎

制作者：宮澤一郎

底 本：「日本人の美と信仰」
大和書房

1968年6月10日 初版発行

日本文学電子図書館